

京都フィロムジカ管弦楽団
第24回定期演奏会
2008年12月14日



JEAN SIBELIUS
KULLERVO



ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第24回目となりました。今回の演奏会は、指揮者に清水史広氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる交響曲を、披露してくれるものと期待致しております。本日の聞き所は1892年4月28日にシベリウスが書き上げました、故郷フィンランドの国民的大叙事詩（カレワラ）による独唱と合唱と管弦楽の為の交響曲[クッレルヴォ（Kullervo）]Op.7です。北国の厳しく澄み切った冬の景色と、近隣国からの侵略攻撃に耐え忍ぶ国民性を、この曲から感じ取っていただければ、と思います。また、第13、14、そして18回とご出演いただきフィロムジカにはすっかりお馴染みの、ソプラノの好本由希子さん、それからバリトンの時宗 務さんと合唱の京都男声合唱団の方々と大きな編成で舞台を盛り上げて下さいます。年の暮れのひとときをお楽しみいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました会員の皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

京都フィロムジカ管弦楽団が創立してから今年で12年になりました。人と言えば年男、年女です。当団は2年に1回大規模演奏会を開いているので、定期演奏会が4の倍数で節目となります。今年はその6クール目、第24回です。きょうは団にとって大きな成長となる演目を演奏します。この曲を12年間のひとつの到達点としたいです。これからも人の成長のようにたくさんを経験して、そこにとどまらず、さらにその次をめざして行きたいと思っていますのでご指導よろしく願います。本日はご来場ありがとうございました。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- ・本日の演目には長い休譜がたくさんあります。演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。
- ・携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
- ・演奏中の私語は固くお断りいたします。
- ・客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- ・補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- ・演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- ・咳払いもできるかぎりお控えください。どうしてもこらえられない場合はハンカチやタオルで口をおおうよう、周囲のお客様へのご配慮をお願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

京都フィロムジカ管弦楽団 第24回定期演奏会

滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール (大ホール)

2008年12月14日(日) 午後2時開演

1:15～ ロビーコンサート

🌀 曲目 🌀

ジャン・シベリウス (1865-1957) / 『クッレルヴォ』 作品7

Jean SIBELIUS : Kullervo, op. 7

- | | | |
|----------------|----------------------------------|------------------------------|
| I. イントロダクション | I. Johdanto | I. Introduction |
| II. クッレルヴォの青春 | II. Kullervon nuoruus | II. Kullervo's Youth |
| III. クッレルヴォと妹 | III. Kullervo ja hänen sisarensa | III. Kullervo and his Sister |
| IV. 出征するクッレルヴォ | IV. Kullervon sotaanlähtö | IV. Kullervo Goes to War |
| V. クッレルヴォの死 | V. Kullervon kuolema | V. Kullervo's Death |

※本日の公演に休憩はございません

ソプラノ独唱：好本 由希子 バリトン独唱：時宗 務 男声合唱：京都男声合唱団

指揮：清水 史広

後援

日本シベリウス協会／関西合唱連盟／京都市立芸術大学音楽学部同窓会 真声会
京都市立芸術大学音楽学部同窓会 真声会京都支部／京都市立芸術大学音楽学部同窓会 真声会大阪支部

ロビーコンサート

シベリウス／混声合唱曲「目覚めよ」「テレゼ・ハールに捧ぐ(第1稿)」

Tp. 遠藤、中西 Hr. 坂口、草木

…シベリウスの合唱曲2曲を、金管四重奏にアレンジしてお届けします。原曲は、シベリウスの母語・スウェーデン語で書かれた詩に音楽をつけたものです。(遠藤)

ブラームス／クラリネット五重奏より第1楽章

Vn. 西村せり花、澤田 Va. 吉川 Vc. 波多野 Cl. 田中慎一郎

…ブラームスは晩年にミュールフェルトというクラリネット奏者と出会い、一度引退した創作活動を再開してこの曲を作曲しました。哀愁の中にかすかな温かみを感じる傑作で、彼の最晩年の作品であり、若い頃から一途に想いを寄せたクララ・シューマンへのメッセージを込めた曲であるとも言われています。(西村せり花)

チャイコフスキー／弦楽六重奏「フィレンチェの思い出」より第1楽章

Vn. 田原、山口 Va. 田中邦人、新居 Vc. 小林、波多野

…チャイコフスキーがフィレンチェに滞在中に作曲に取り掛かったことから、副題として「フィレンチェの思い出」がついております。晩年の想像力豊かなころに作曲されており、チャイコフスキーらしく激しく叙情的な曲です。(田中邦人)

指揮者

清水 史広 (しみず ふみひろ)

相愛大学音楽部卒業。酒井睦雄、尾高忠明、円光寺雅彦の各氏に師事。

オペラ「ヘンゼルとグレーテル」で指揮者としてデビュー。以来コンサートやオペラで幅広く活躍し、京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラアンサンブル金沢、京都フィルハーモニー室内合奏団等を指揮。オペラではモンテヴェルディからブリテンに至るまで数多くの演目を指揮する。また、1995年から1998年まで文化庁オペラ研修所の講師として後進の育成に携わり、自らもウバルト・ガルディーニ氏の薫陶を受ける。

1996年にウィーン及びザルツブルグでブラームスの交響曲第2番等を指揮した公演は新聞紙上で「絶賛の嵐」と賞され、以来オーストリア、イギリス、ポーランドなどへも活動の幅を広げている。国内ではびわ湖ホールとの関係も深く、「魔笛」「こうもり」「メリー・ウィドー」など同劇場のオペラ公演やコンサートレパートリーを指揮する一方、2002年には定期演奏会にも登場し、ラヴェルの「子供と魔法」等を上演。

2003年には関西の若手奏者達により結成された SINFONIA DOMANI の音楽監督に就任。自ら提唱した「イギリス音楽プロジェクト」は現在も進行中である。また2006年には Jean Le Toise Yokohama の音楽監督に就任し、モーツァルトを集中的に採り上げた同シーズンにおいて、2007年8月に上演された「フィガロの結婚」は各方面から高い評価を受けた。同団においては、ウィンドアンサンブルやストリングアンサンブルを結成するなどユニークな活動も展開し、去る11月に行ったウィンドアンサンブルの第一回公演は瑞々しい演奏で聴衆に温かく迎えられた。

1991年～98年には関西シティフィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を務め、同団の技術的、音楽的成長に多大なる貢献をするなど、プロフェッショナル、アマチュアを問わず、後進の育成にも精力的に取り組んでいる。

2007年12月に京都フィロムジカ管弦楽団第22回定期演奏会でシベリウス第7交響曲等を指揮、大成功を収める。



僕が清水史広という指揮者を知ったのは10年以上も前の1995年のことだ。吹田メイシアターでおこなわれた関西大学交響楽団のサマーコンサートで、シベリウスの第1交響曲を指揮したのだ。清水氏と関大響は、決してシベリウスの最高傑作とは言えないこの初期の作品から、紛れも無いシベリウスならではの瑞々しい響きを引き出していた。僕はアンケートに「究極の名演！」と興奮気味に書き込んだのをよく覚えている。僕はその後、この曲をN. ヤルヴィヤンやヴァンスカといった一流指揮者の演奏で聴いたが、それらの演奏すら、清新な衝撃という点で清水/関大響には及ばない。僕が氏の演奏を聴いたのはこの一度きりであったが、清水史広の名はシベリウスを得意とする指揮者として僕の記憶に刻み込まれた。だから、昨年、第22回定期演奏会の曲目がシベリウス7番に決まったとき、僕は迷わず清水氏を客演指揮者に推薦した。しかしながら、氏の所在を確認するのに大いに手間取り、ようやく連絡がついたときにはもう6月も末になっていた。12月の演奏会の指揮を依頼するには絶望的な遅さである。にもかかわらず交渉はほとんど拍子に進み、招聘が実現、そして定期演奏会の大成功へと一気に突き進んだ。この成功が、本日の『クツレルヴォ』における清水氏の再招聘に繋がっているのは言うまでもない。

このように、フィロムジカと清水氏の関わりは95年の関大響の演奏会に端を発しているわけだが、実はこの演奏会を聴くかどうか、僕は直前まで迷っていた。というのも、同じ時間にシンフォニーホールでは読売日響の大阪公演が予定されていたからだ(曲目は忘れたが、いつも聴いているありふれた作品だったと思う)。「知らない指揮者と素人のオーケストラで大好きなシベリウスを聴くか、日本最高級のプロ・オーケストラでありふれた曲を聴くか」の究極の選択を迫られ、それこそ梅田に着くまで迷っていたのだが、最終的には「俺はシベリウスが好きなんだ！」という思いが勝って阪急電車に飛び乗った。もしもこの瞬間、判断を誤って環状線に乗っていたら、本日の演奏会を清水氏が振ることも無かったことになる。シベリウスの大作『クツレルヴォ』を清水史広という理想的な指揮者とともに演奏する、という幸福は、10年以上前からレールが敷かれていた嬉しい宿命のような気がしてならない。

(Tp.遠藤 啓輔)

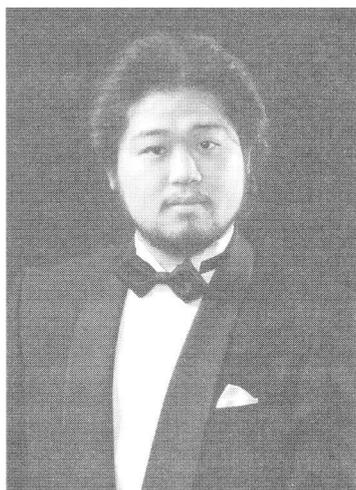
独唱・言語指導

ソプラノ： 好本 由希子 (よしもと ゆきこ)

京都市立芸術大学音楽学部声楽専攻、同大学院修了。卒業演奏会に出演。米・ロチェスター大学イーストマン音楽学校夏季セミナーオーディションに合格しセミナー終了時に受講者選抜演奏会に出演。第5回さくらびあ新人コンクールにおいてさくらびあ大賞受賞、次年度同コンクールにおいて招待演奏を行う。2005年初リサイタル開催。コロンビア大学中世日本研究所の招聘により京都、ニューヨークにおいて献歌を行う。

各地のオーケストラ、合唱団との共演はC. ニールセン「交響曲・広がり」、F. メンデルスゾーン「真夏の夜の夢」、G. フォーレ「レクイエム」、R. ヴォーン・ウィリアムス「田園交響曲」、A. ヴィヴァルディ「グロリアミサ」、F. プーランク「グロリア」等ソプラノソロ他オペラやコンサートに出演。

草野道広、高須礼子、R. シェーン、釜洞祐子、益子明美の各氏に師事。2003年より3年間豊中市文化芸術センター基本構想・計画検討委員を務めた他、各地で合唱団のヴォイストレーナーやアカデミー講師としても活動している。



バリトン： 時宗 務 (ときむね つとむ)

兵庫県出身。大阪音楽大学大学院音楽研究科オペラ研究室修了。2003KACC コンサート、第49回朝日推薦演奏会、第41回なにわ芸術祭などの各種コンサートに出演。

在学中より学生選抜オペラ『フィガロの結婚』アルマヴィーヴァ伯爵、『ドン・ジョヴァンニ』騎士長、『コジ・ファン・トゥッテ』ドン・アルフォンソ役出演し、在学中及び大学院終了後も関西を中心に50本近いオペラ作品に出演。芦屋市民オペラ公演『魔法の笛』ではハパゲーノと演出助手を、『こうもり』ではファルケと演出を兼任し好評を得る。またコンサート歌手としてフォーレ『レクイエム』、宮城道雄『日蓮』、バッハ『ミサ・ブレヴィス BWV236』等出演。

現在、大阪音楽大学演奏員。GAIB!!!、上方オペラ工房、The TARO Singers、DaynaGoN、東京ヴォイシズ各メンバー。コールハイフォニカ副指揮者。大阪音楽大学名誉教授・永井和子氏に師事。

フィンランド語指導： 松原 千振 (まつばら ちぶる)

1951年生まれ。国立音楽大学、シベリウスアカデミーに学び、合唱指揮のマスタークラスを卒業した。ハンガリーのコダーイインスティテュートにて合唱指揮を学び、フランスのソレム修道院でグレゴリオ聖歌を修めた。E. エーリクソン、D. O. スターンランドに師事した。

1978年より、ヘルシンキ大学男声合唱団第2指揮者・フィンランド放送合唱団の団員兼指揮者・タピオラ少年少女合唱団副指揮者を歴任。また、エストニアフィルハーモニー合唱団、リトアニア放送合唱団などの首席客演指揮者を務める。東京混声合唱団常任指揮者。訳書「世界をつなぐ歌の橋」(1994)

男声合唱

京都男声合唱団

1965年創立。創設者は青少年の合唱を活動育成し『佐々木賞』にその名を残す故・佐々木日出夫氏。佐々木氏の逝去後は、野田常雄氏が指揮者をつとめる。邦人作品、外国作品から仏教賛歌にいたるまで、幅広いレパートリーを誇る。単独での演奏会のほか、世界各国の合唱団とのジョイントコンサート、京響のシェーンベルク『グレの歌』への出演など、精力的に活動。08年1月、第30回記念演奏会を京都コンサートホールにて開催。

TOP TENOR

青木 恒弘
一之瀬 祥夫
薩摩 光邦
槌田 義之
都鳥 弘紀
西村 剛
西村 昭夫
野田 常雄
広崎 公伸
水口 尚樹
吉村 雅男

2ND TENOR

井上 大三
小松 淳一
酒井 崇秀
正保 富三
杉山 毅
園田 充則
堂本 明寛
原田 孝一
細井 昭宏
松田 太加志
松本 唯志
三宅 正房
山川 雄史

BARITON

飯田 寛
岩見 能武
岸本 幸三
許斐 勝利
地主 政樹
高橋 良造
丹下 博
富永 陽一
中井 良治
中村 邦雄
藤崎 広造
松田 吉弘
宮崎 又郎
森澤 康光

BASS

阿部 健
相馬 久敬
竹島 恭一
田中 雄貴
谷村 暉
細田 秀正
増田 孝之祐
松田 正人
村守 嘉郎
山崎 公平
山田 浩一
吉森 赳夫
四辻 悌昭

練習ピアニスト

田村 喜久子

合唱指揮：野田 常雄 (京都男声合唱団指揮者)

1943年京都生まれ。幼少の頃から音楽に造詣が深く、合唱歴は45年に及びソリストとしても活躍。これまでにプリムローズ合唱団、合唱団京都エコー、滋賀男声合唱団等で、高田弘昭氏、浅井敬壹氏、佐々木日出夫氏に師事し指揮者をつとめる。2001年、京都男声合唱団の指揮者に就任し、現在に至る。



齊藤酒造・蔵元直営居酒屋
営業時間 17:30-23:30
近鉄桃山御陵前駅正面徒歩0分
お電話 075-612-1000にてご予約承り中
ネットでお酒も販売中！
詳しくは → <http://www.moromi-ne.com/> をご覧下さい

全国新酒鑑評会 11年連続金賞受賞
清酒 英熟 醸造元 <http://www.eikun.com/>
齊藤酒造株式会社
〒612-8207 伏見区横大路三栖山城屋敷町105番地
TEL 075-611-2124 FAX 075-611-2124

曲目解説

シベリウス／『クッレルヴォ』作品7

第1章 フィンランド、カレワラ、シベリウス

シベリウスの、なかでも『フィンランディア』の解説で、「当時フィンランドはロシアの圧政に苦しんでおり、愛国者シベリウスはフィンランド人が感じていた怒りを音楽に込めた云々」といった紋切り型の解説を嫌というほど目にされた方は多いだろう。しかしながら、フィンランドの歴史とシベリウスのバックボーンはそのような単純なものではない。ロシアの支配を受ける以前も「フィンランド」は独立した国ではなかったのだ。バルト海の東北沿岸に、フィン語（ヨーロッパの言葉とは異質の文法を持つ）を話す人々が昔から住んでいたのだが、独自に国家を形成することはなく、12世紀よりスウェーデン王国の支配を受けていた。それが、19世紀初頭にロシアが侵攻してこの地を奪い、ロシアの属国化されたのである。こうしてフィンランドは、農民層のフィン語系住民と、スウェーデン統治時代の支配者層の子孫であるスウェーデン語系住民が混在し^(註1)、ロシアの支配を受ける、という複雑な様相を呈することになった。こうした中で、「スウェーデンでもロシアでもない」アイデンティティーとして「フィンランド人」という概念が新たに醸成されていったのである。その過程で、フィンランド独自の文化を確立しようとする、「民族ロマンティズム」と呼ばれる文化活動がなされるようになった^(註2)。その最大の精華が、大叙事詩『カレワラ』の編纂である。

フィンランドではフィン語による叙事詩が太古より口承され、ロシア国境に近い辺境の地・カレリア地方などでは19世紀にいたるまで歌い継がれてきた。エリアス・リョンロット（1802～84）は現地におもむき、夥しい数の叙事詩を古老たちから直接聞き取って採集。そして、それらを組み合わせて大胆に補筆し、全50章からなる一続きの物語に仕立て上げた。これが、『カレワラ』^(註3)である。好色で血の気の多い英雄たち、高潔で誇り高い乙女たち。そうした魅力あふれる登場人物たちが、森や海の生き物たちと会話し、呪歌を歌いながら、フィンランドの自然を舞台に豪快な物語を展開する。そして、22,795行という膨大な詩のすべてが8音節からなる規則正しい韻律を踏む、巨大で緻密な叙事詩である。このフィン語による偉大な文学の出現は、フィンランド人を大いに勇気付けた。注意しなければならないのは、リョンロットをはじめとする民族ロマンティズムの牽引者の多くはスウェーデン語系の人々であったということだ。彼らスウェーデン語系住民は、フィン語を学習し、フィンランド各地に住む民衆の生活の中に文化の源泉を求めたのだ。したがって、「フィンランド人」のアイデンティティーは、言語の差異を超越したものである。「フィンランド人」とは、「フィンランドに生を受けた者」「フィンランドに住む者」もっと極論すれば「フィンランドの豊かな自然の恵みを享受して生きる者」ということになるのではないだろうか。

そして、シベリウスもスウェーデン語系のフィンランド人だ。西欧への留学を機に「フィンランド人」のアイデンティティーに目覚めたシベリウスは、フィン語を学習し、『カレワラ』から題材を取った作品を多数作曲する。そして、シベリウスにとっての「フィンランド」が、豊かな自然に恵まれた大地であったことは、その音楽を聴けば明らかだ。少年シベリウスは、大自然の中で一人ヴァイオリンを弾くことを好んだという。そのためかシベリウスの音楽には、肌から感じ取った自然が流れているのを感じる。冷涼で澄んだ響き、雪嵐のように荒々しい伴奏、妖精のような神出鬼没の動機、それらが渾然と一体になった独特の音楽は、フィンランドの自然がシベリウスに与えたものに違いない。そして、自然をその核とするシベリウスの音楽は、自然が人類普遍の財産であるがゆえに、ただ「フィンランド人」の紐帯となるばかりでなく、人類普遍の至宝ともなり得るのである。

第2章 「クッレルヴォの物語」とシベリウスの『クッレルヴォ』

ベルリンとヴィーンに留学していた青年シベリウスは、『カレワラ』の中でも最も感動的な悲劇である「クッレルヴォの物語」（『カレワラ』第31～36章）を題材とした大作を着想し、帰国後にそれを完成する。1892年にな

された初演は未曾有の大成功を収め、一躍シベリウスはフィンランドを代表する作曲家となった。このシベリウスの出世作『クッレルヴォ』(作品番号7)は、交響曲を構成する4つの楽章(第1楽章、緩徐楽章、スケルツォ楽章、終楽章)の中央に、独唱・合唱を伴うオペラのような楽章を挿入した、5楽章形式の大作である(註4)。そして、第3楽章と第5楽章に導入された声楽の歌詞は『カレワラ』から引用されている。

ここで、クッレルヴォの物語をシベリウスの音楽とともに紹介していこう。

太古のフィンランド、反目しあっていた兄弟カレルヴォとウンタモはついに戦をはじめ、ウンタモはカレルヴォ一族を皆殺しにする。しかしカレルヴォの幼子クッレルヴォは強靱な体を持っていたため、焼いても縛り首にしても死ななかった。クッレルヴォを殺すことを断念したウンタモは、クッレルヴォを奴隷とした。シベリウスは、第1楽章『イントロダクション』でこうした血生臭いストーリーを、暗く荒々しい音楽によって見事に表現している。22小節目まで第1ヴァイオリンが登場しない重々しいオーケストレーションによって、全曲の冒頭から聴衆を悲劇の世界に否応無く引きずり込む。そしてこの『イントロダクション』は単に物語の導入であるばかりでなく、聴衆をフィンランドの自然へといざなう「どこでもドア」の役割をも果たしている。深く暗い森、白夜の妖気、短い夏の太陽のきらめき、地平線の遙かなる広がり、そうした自然の多様な姿が描きこまれた重要な楽章である。

成長したクッレルヴォはウンタモの家で奴隷として働かされるが、あまりの怪力が災いして、何をやっても上手くいかない。開墾を任せればあらゆる木々をなぎ倒して荒地を作り、垣根を作らせれば雲まで届く垣根を作り、脱穀をさせればライ麦をことごとく粉碎してしまう。役立たずのクッレルヴォはウンタモの家を追い出され、鍛冶屋に二束三文で売り飛ばされる。ある日、鍛冶屋の妻がクッレルヴォの弁当のパンに小石を挟むという他愛も無い悪戯をする。これに激怒したクッレルヴォは、野獣たちに食い殺させるという残虐なやり方で彼女を惨殺し、鍛冶屋の家から逃げ出す。シベリウスはこの悲しみと屈辱にまみれた『クッレルヴォの青春』を、沈痛な音楽で見事に描き出した(第2楽章)。すすり泣くような弦楽器の合奏で始まり、イングリッシュホルンが静かに恨みを告発するようにつぶやく。そして、クライマックスでは慟哭のようにオーケストラが吼えたてる。この曲の白眉というべき楽章だ。

鍛冶屋の家を逃げ出したクッレルヴォが故郷に戻って見たところ、死んだと思った家族が実は生きていたことがわかる(支離滅裂なことこの上ないが、こうした点をいちいち気にしては叙事詩を楽しむことはできなからう)。クッレルヴォは家族の手伝いを始めるが、家にも役立たずな彼は税金を払いに行く仕事を押し付けられ、ソリに乗って遠出する。第3楽章『クッレルヴォと妹』は、このソリが走る場面から始まる。雪煙のようにトライアングルがきらめき、疾走する馬のように弦楽器が躍動する。そして、男声合唱が「Kullervo Kalervon poika(クッレルヴォ、カレルヴォの息子)・・・」(註5)と『カレワラ』の詩を堂々と歌い始める。5拍子という珍しい拍子で書かれているが、これは『カレワラ』の詠唱が5拍子を基本としていることによる。クッレルヴォは道すがら、乙女をみつける。クッレルヴォ(バリトン独唱)は乙女に自分のソリに乗るように誘うが、乙女(ソプラノ独唱)は激しく罵って拒絶する。クッレルヴォは再び乙女をみつけ同様に声をかけるが、やはり拒絶される。クッレルヴォは3人目の乙女に声をかけまとも拒絶されるが、クッレルヴォはついに力づくで乙女をソリに引きずり込む。乙女は激しく呪いの言葉を浴びせかけて抵抗するが(この部分での切羽詰まったソプラノの歌には鬼気迫るものがある!)、クッレルヴォが自慢の金銀財宝を見せるや、乙女は態度を軟化させてしまう。オーボエのとろけるようなソロが金品に幻惑された乙女の気持ちを描き、男声合唱が「銀が誘惑し、金が惑わした」と歌って、来るべき破滅の運命を予告する。男声合唱はここで役割を終え、オーケストラのみでクッレルヴォと乙女が結ぶ肉体関係を官能的かつ野獣的に描き出す。全曲中最大の音量で頂点を迎えると、一気に力が抜けて冷静さを取り戻す。ここから楽章は後半に突入する。前半が男声合唱の主導する5拍子の音楽であったのに対し、後半は2拍子系や3拍子系の馴染みやすい音楽に変わり、2人の独唱者が歌い交わす。前半は『カレワラ』のストーリーを忠実に淡々と再現していたのに対し、後半は主人公2人の心の動きにスポットライトを当てている、とでも言えようか。ソリの上で一夜を明かした2人は、馬のひづめの音を聞きながら、身の上を語り合う。そして、互いの父親の名が同じ「カ

レルヴォ」であるという衝撃的事実を知り、ようやく2人は生き別れになった実の兄妹であることに気付く。つまり近親相姦に陥ったのである。妹は、森でベリーを摘んでいるうちに道に迷ったこと、丘に登って助けを求めても精霊から冷たい言葉を浴びせられ見放されたことを切々と歌う（この箇所は、あらゆる音楽の中でも最も美しく美しいもののひとつだ!）。そして、「もっと早くに自殺していれば、美しい花に生まれ変わっていただろうに、このような恐ろしい目に会うこともなかったろうに」と静かに、しかし決然と歌う。この後、妹は川に身投げして自殺するのだが、シベリウスはその場面を一切音楽で描いていない。ただ、長大な総休止が死の沈黙を暗示し、続いて襲ってくる木管の絶叫がクッレルヴォの悲痛を代弁する。楽章の最後は、オーケストラの切り刻むような伴奏とともにクッレルヴォが泣き叫び、ティンパニの強打が悲劇にとどめを刺す。

絶望したクッレルヴォは妹の後を追うことを考えるが、死ぬ前に諸悪の根源である宿敵ウンタモを滅ぼすことを決意する。クッレルヴォは戦に向かう前に家族のもとに戻り別れを告げるが、悲しんでくれたのは母親一人で、父にも弟たちにも冷たく見放される。そして、クッレルヴォは角笛を吹き鳴らしながら出征し、ウンタモ一族を皆殺しにする。シベリウスはこの話を第4楽章『出征するクッレルヴォ』として描いたが、「戦うクッレルヴォ」と題されていない点は重要である。僕はこの楽章を、戦いに向かう道すがら、悲惨と屈辱しかなかった自分の人生を振り返るクッレルヴォの心象風景だと考えている。「行進曲風に」と表情指定されているにもかかわらず、不自然な位置にアクセントがあったり不意に木管の強音が襲ってきたり、歩は順調に進まない。挫折続きだったクッレルヴォの人生そのままだ。そして、先行楽章の動機がフラッシュバックするように立ち現れ、何もいいことがなかった生涯を回顧する。楽章の終盤、トランペットが混乱を巻き起こすかのように鋭く吹き鳴らされる部分が戦いを表現しているのだろうが、いともあっけなく終わる。最後は勝利のファンファーレとなるが、実に単調で覇気がない。それもそのはず、宿敵を滅ぼした今や、クッレルヴォに残された仕事は自害だけになったのだ。

戦いを終えたクッレルヴォが故郷に戻ると、家族は皆死に絶えており、家も荒れ果てていた。彼は犬を連れて森をさまよう。第5楽章『クッレルヴォの死』は、焦点の定まらないオーケストラの弱音で始まる。心ここにあらずといったクッレルヴォの様子を描いているのだろう。そして男声合唱が厳かに『カレワラ』の詩を語る。クッレルヴォは森をさまよううちに、妹が自殺した場所にたどり着く。この部分の『カレワラ』の詩は実に美しい。シベリウスが第5楽章で再び男声合唱を用いたのも、この詩の美しさを生かすためだと思う。特に、「そこでは艶やかな芝草が泣き、優雅な牧場が嘆いていた、若草は悲しみにむせび、ヒースの花はなじっていた、あの少女の陵辱を」というくだりは素晴らしい（僕は電車の中でこの部分を読んでいて、あまりの悲しさに近鉄車中で茫然としてしまったことを今でもよく覚えている）。そして、男声合唱がこのくだりを歌い終えると木管が絶叫する。これはもちろん、第3楽章の木管の絶叫の再現である。妹を死なせた衝撃が再びクッレルヴォを襲ったのだ。弦楽器のけたたましいまでの伴奏が音楽の悲痛な緊張感を高め、男声合唱はクッレルヴォが自殺を決意して剣を抜いたことを絶叫するように語る。音楽が悲劇的な頂点を迎えた途端に音が消え、長大な総休止になる。第3楽章での妹の死と同様、クッレルヴォの死の決意も沈黙によって描かれたのである。そして、男声合唱が、クッレルヴォが剣を胸に突き刺したことを語ると、オーケストラが鎮魂歌のように悲しく演奏する。最後は、男声合唱とオーケストラが渾身の力で悲劇の英雄の死を知らせ、この大曲は重々しく終わる。

第3章 『クッレルヴォ』の音楽の魅力

この『クッレルヴォ』はシベリウスの最初期の管弦楽作品である。それだけに、西欧（特にドイツ、オーストリア）から受けた影響、大胆な前衛性、フィンランドの自然に根ざしたシベリウスの個性が、ラフ・スケッチのような粗々しさを残したまま描き込まれており、それがこの曲の大きな魅力になっている。ここではそうした魅力の一部を紹介したい。

まず、留学していたドイツ・オーストリアの音楽の影響として、有名なベートーベン第5交響曲の冒頭音型（いわゆる「ジャ・ジャ・ジャ・ジャー」）が各楽章の要所で使われていることが挙げられる。この動機はブラームスやロット、マーラーらロマン派の作曲家の多くが自作に引用しているが、シベリウスもそうしたロマン派の流れを

汲む作曲家の一人であるといえよう。

次に、管弦楽法における前衛性として、イングリッシュホルンの使用法が挙げられる。オーボエのような華も無く、ファゴットのような安定感も無い、どこかうつろなイングリッシュホルンの音色は、フランクの交響曲のように鄙びた味わいを醸し出す一方で、ベルリオーズの『幻想交響曲』のように、悪魔など人智を超えた不気味な存在を象徴する楽器としても使用される。『クツレルヴォ』での使用法は明らかに後者の系列に属する^(註6)。イングリッシュホルンは第2楽章「クツレルヴォの青春」と第5楽章「クツレルヴォの死」で用いられる。まるでクツレルヴォが生涯に味わった不幸の数々をイングリッシュホルンが淡々と告発しているようだ。このようにイングリッシュホルンに「告発者」としての役割を負わせる管弦楽法は、ショスタコーヴィチの第8交響曲や第11交響曲が有名であるが、そのずっと前に同様のオーケストレーションを試みたシベリウスの先見性に驚かされる。

そして、若書きの作品でありながらも、シベリウスの独自性は遺憾なく発揮されている。例えば、小節線を微妙に越えて変化する独特なメロディーが随所に見られる。譜例1は第1楽章の旋律だが、譜例2のように小節の変わり目で音程が変わっていた場合を想像してみると、相当に印象が異なる。音の変換点を微妙にぼかすだけで、落ち着きを欠いていてどこか胸騒ぎを感じさせる神秘的な旋律に早変わりするのだ。こうした旋律の特徴はシベリウスの生涯を通して見られる個性であり、最高傑作とされる第4交響曲の旋律はその最たるものと言えよう。僕はこのシベリウスの表現は、フィンランドの自然からもたらされたものと想像している。高緯度のフィンランドでは、日没後も西の空が青々としており、明るくも暗くもない不安定な空が長時間保たれている。日本でも日没直後の昼でも夜でもない時間帯を「逢魔が刻」(魔物に出会う時間、という意味)と呼んで恐れていたが、フィンランドの「逢魔が刻」は一層長く恐ろしい。シベリウスの、敢えて輪郭をぼかした不安定な旋律は、フィンランドの空が我々にもたらす不安そのものである。



譜例1 第1楽章：70小節～



譜例2 (譜例1を加工)

そして、僕が『クツレルヴォ』の中で最もフィンランド的だと思っているのが、長い総休止である。『クツレルヴォ』には各楽章に数小節にまたがる長大な総休止がある。総休止は、シベリウスに最も強い影響を与えた作曲家ブルックナーの特徴でもあるが、ブルックナーの総休止とシベリウスの総休止は根本的に性格が異なる。ブルックナーの総休止は残響に身を浸すためのものであり、大聖堂で賛美歌を聴くような心地良い総休止である。これに対し、シベリウスの数小節に及ぶ総休止は、あまりにも長いので残響さえ消えてしまう。そして、残響が消えた後に待っているものは完全な無音状態である。この無音こそ、この曲の最もフィンランド的な部分だと思う。フィンランドの自然はきわめて静寂だというだけでなく、視覚的にも無音を感じさせる。日本人がフィンランドの風景を見て最も驚愕するのは「山が無い」ことであろう。日本ではまず見ることでできない、360度地平線に囲まれた風景の中に身を置くと、(たとえそこが豊かな水や美しい緑にあふれていたとしても)「何もない荒涼とした世界」を感じさせ、それが「無音」の印象をさらに強くするのである。そして、その「無音」は恐怖である。芥川也寸志は「無音」について、「自分がその静寂のなかに吸い込まれていくような」、「恐怖に近い非常に強い孤独感に襲われ」と書いているが^(註7)、フィンランドの静寂の風景はまさにそのようなものである。『クツレルヴォ』に頻出する長大な総休止は、フィンランドの「無音」の恐怖にほかならない。そして、前章で書いたように、「死」という最大の恐怖が「無音」によって表現されているのである。

第4章 我々は何故『クツレルヴォ』に感動するのか

さて、今回の『クツレルヴォ』の演奏に対して、多くの方々から強い期待を寄せていただいている。毎回フィ

ロムジカはその斬新な選曲に期待を寄せられているのだが、今回寄せられている期待には何か特別なものを感じる。一様に『クッレルヴォ』への強い熱意を感じるのだ。それだけこの曲に人を熱狂させるものがあるに違いない。実際、僕はこの曲を4回ライブで聴いたが、そのいずれにも忘れがたい感銘を受けた。とりわけ、今年のシベリウス音楽祭（フィンランド・ラハティ市）の初日に聴いた演奏は、フィンランドの聴衆の反応ともども強く印象に残っている。圧倒的な『クッレルヴォ』の名演に対し聴衆たちは、歓声を上げることも総立ちになることもなく、実に落ち着いて拍手をしていたのだ。決してフィンランドの聴衆が物静かなのではない。その証拠に、同音楽祭の最終日、アンコールに『フィンランディア』が演奏され始めた途端、「待ってました！」と言わんばかりのどよめきが起き、演奏終了と同時に場内総立ちとなったのだ。これほどまでに熱い聴衆たちが、『クッレルヴォ』に対しては押し黙るような静かな反応を示したのである。まるで、各人の心の宝箱に感動を大切にしまっているようだった。この聴衆の反応にこそ、この曲の魅力の秘密がありそうである。思うに、『クッレルヴォ』は感動を皆で共有する曲というよりも、個々人が一人でしみじみと聴く曲なのではないだろうか。つまり、各人が自身をクッレルヴォに投影し、自らが悲劇の主人公となるのである。もちろん、一族同士の相克だの近親相姦だのといったことは万人に普遍的な体験ではない。しかし、第2楽章で描かれた青春の悲愴——良かれと思つての懸命な行動が誰にも理解されず、いつも「役立たず」と罵られる——は誰しもが体験していることではないだろうか。第2楽章をきっかけにして、聴衆は自分を主人公にした悲劇の音楽物語の世界に入り込み、自分のために泣くことができるのである。『クッレルヴォ』はいわば究極の自己愛の音楽なのだ。

自分を愛する、こんな当たり前のことが今の世の中では非常に難しくなっている。人間としての尊厳を無視されて組織や社会の構成部品として扱われ、そうした境遇に置かれた自分の不幸を嘆こうものなら「苦しいのは自分だけではない」だの「自己責任でどうにかしろ」だのと突き放される。そうした殺伐とした社会の中で、人々は、自分自身が愛するに足るかけがえの無い存在であるということをお忘れつつあるように思う。僕たちが前回の定期演奏会を催していたその日（6月8日）東京では、青年が見ず知らずの通行人を次々と刺し殺すという事件が起きていた。犯人が何故このような凶行に走ったか、これから徐々に明らかにされていくだろうが、少なくとも犯人が「自分を愛せない」人であったことは確かなようだ。「自分を愛せない人は他人を愛することもできない。」言い古されてきた格言が実に重みを持って響いてくる。皆さん、『クッレルヴォ』を聴いている間、どうかあなた自身を主役に悲劇の物語を作り上げ、あなた自身のために泣いて下さい。自分を愛し、他人を愛するために。

註1：また、北部に先住民のサーミ人（ラップ人ともいう）が住む。

註2：『世界各国史 21 北欧史』（山川出版社）、『フィンランドを知るための44章』（明石書店）等を参考にした。

註3：『カレワラ』は小泉保訳の岩波文庫版を参照した。また、クッレルヴォに関する部分については菅野浩和訳や大東省三訳も参照した。

註4：このため、この曲が「交響曲」と見做されることも多い。ただし、シベリウス本人は、最終的にはこの曲を「交響曲」と題しなかった。

註5：この「クッレルヴォ、カレルヴォの息子、」という歌い出しは執拗なまでに反復されるが、何故だろうか。この「カレルヴォの息子」という言葉は、リョンロットが脚色する前の原詩では「カレワの息子」と歌われていたらしい。カレワとは伝説上のフィンランド人の始祖である（もちろん『カレワラ』は「カレワ」から派生した語である）。このことから、「クッレルヴォ、カレルヴォの息子、」は「クッレルヴォは我等と同じカレワの子孫」「クッレルヴォは我が兄弟」「クッレルヴォは私の分身」と読み替えることが可能なのではないだろうか。僕は第4章で述べるように、自分自身を主人公クッレルヴォに投影することが「クッレルヴォの物語」の愉しみ方だと考える。「クッレルヴォ、カレルヴォの子」という歌い出しも、クッレルヴォを我々の分身として読むことの手助けをしてくれているように感じる。

註6：地獄に住む美しい白鳥を描いたシベリウス作曲「トゥオネラの白鳥」でのイングリッシュホルンの使用法も同様である。

註7：芥川也寸志『音楽の基礎』（岩波新書）

第3楽章 歌詞

※日本語で大意を示しておいたが、逐語訳ではない。正確な訳は『カレワラ』の邦訳を参照されたい。

Kullervo, Kalervon poika, sinisukka äijön lapsi, hivus keltainen, korea,
kengän kauto kaunokainen, läksi viemähän vetoja, maajyviä maksamahan.

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子。青い靴下の子。見事な金髪、綺麗な革靴、税を納めに出かけた。

<金管による短い間奏>

Vietyä vetoperänsä, maajyväset maksettua, rekehensä reutoaikse, kohennaikse korjahansa, Alkoi kulkea kotihin, matkata omille maille.

(男声合唱) 税を納め終え、ソリに乗り、故郷の家に向け旅立った。

<ピッコロによる間奏>

Ajoa järjyttelevi, matkoansa mittelevi, noilla Väinön kankahilla, ammoiden raatuilla ahoilla. Neiti vastahan tulevi, hivus kulta hiihtelevi
noilla Väinön kankahilla, ammoiden raatuilla ahoilla, Kullervo, Kalervon poika, jo tuossa piättelevi, alkoi neittä haastatella, haastatella, houkutelaa:

(男声合唱) ソリを駆け旅路を走った。かつて開墾したワイニョの荒野で、金髪の乙女に出会った。スキーで滑っていた。
クッレルヴォ、カレルヴォの子は、ソリを止め誘惑した。

"Nouse, neito, korjahani, taaksi maata taljoilleni!"

(クッレルヴォ) 「俺のソリに乗ってこの毛皮に横たわれよ！」

"Surma sulle korjahasi, tauti taaksi taljoil lesi."

(乙女1) 「死がソリに乗れ！ 病が毛皮に座れ！」

<オーケストラによる間奏>

Kullervo, Kalervon poika, sinisukka äijön lapsi, iski virkkua vitsalla, helähytti helmivyöllä. Virkku juoksi, matka joutui, tie vieri, reki rasasi.

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子。青い靴下の子。元気な馬に玉飾りのムチを入れる。旅ははかどり、ソリは揺れる。

<ファゴットによる間奏>

Neiti vastahan tulevi, kautokenkä kaaloavi, selvällä meren sletlällä, ulapalla aukealla.

Kullervo, Kalervon poika, he voista piättelevi, suutansa sovittilevi, sanojansa säätelevi:

(男声合唱) 革靴の乙女と出会った。凍った湖を歩いていた。クッレルヴォ、カレルヴォの子は馬を止めこう言った。

"Tule korjahan, korea, maan valio, matkoihini!"

(クッレルヴォ) 「美しい人よ、一緒に行こう！」

"Tuoni sulle korjahasi Manalainen matkoihisi!"

(乙女2) 「トゥオニ(死神)を乗せな！ マナライネン(死神)と旅しな！」

<オーケストラによる間奏>

Kullervo, Kalervon poika, sinisukka, äijön lapsi, iski virkkua vitsalla, helähytti helmivyöllä. Virkku juoksi, matka joutui, reki vieri, tie lyheni.

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子。青い靴下の子。元気な馬に玉飾りの鞭を入れた。ソリは進み、旅程は縮まる。

<ヴァイオリンによる間奏>

Neiti vastahan tulevi, tinarinta riioavi, noilla Pohjan kankahilla, Lapin laajoilla rajoilla.

Kullervo, Kalervon poika, hevostansa hillitsevi, suutansa sovittilevi, sanojansa säätelevi:

(男声合唱) 錫の胸飾りの乙女と出会った。ポホヤの荒野で、ラップの辺境で。クッレルヴォ、カレルヴォの子は馬を止め言った。

"Kay neito, rekoseheni, armas, alle vilttieni, syömähän omeniani, puremahan päähkeni!"

(クッレルヴォ) 「俺のソリで、リンゴを食べないか、クルミをかじらないか！」

"Sylen, kehjo, kelkkahasi, retkale, rekosehesi! Vilu on olla viltin alla, kolkko korjassa eleä."

(乙女3=妹) 「悪い人！ 唾吐くわよ！ 寒気がする！ 気味悪い！」

Kullervo, Kalervon poika, sinisukka äijön lapsi, koppoi neion korjahansa,

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子、青い靴下の子、ソリの中に乙女を引きずり込み

<ソプラノ独唱と男声合唱が同時進行>

reualti rekosehensa, asetteli taljoillensa,
alle viltin vierretteli.

(男声合唱) ソリの中に乙女を抱き入れ、
毛布の下に押し込めた。

"Päästä pois minua tästä, laske lasta vallallensa, kunnotointa kuulemasta,
pahalaista, palvomasta, tahi potkin pohjan puhki, levittelen liisteheksi,
korjasi pilastehiksi, rämäksi reen retukan!"

(妹) 「去らせて！ 自由にさせて！ ひどいことをしないで！
さもないとソリを粉々に壊すわよ！」

Kullervo, Kalervon poika, sinisukka, äijön lapsi, aukaisi rahaisen arkun, kimahutti kirjakannen,
näytteli hopeitansa, verkaliuskoja levitti, kultasuita sukkasia, võitänsä hopeapäitä.

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子、青い靴下の子。宝箱の蓋を開け、銀や布を、金刺繍の靴下や銀飾りの帯を彼女に見せた。

<オーボエの甘いソロ>

Verat veivät neien mielen, raha muutti morsiamen, hopea hukuttelevi, kulta kuihauttelevi.

(男声合唱) 布は乙女の心を引きつけ、お金は彼女を花嫁に変えた。銀が彼女を誘惑し、金が彼女を惑わした。

<オーケストラによる長大で官能的な間奏>

"Mist' olet sinä sukuisin, kusta, rohkea, rotuisin? Lienet suurtaki sukua, isoa isän aloa."

(妹) 「あなたの素姓を教えてください。きっと大きな武勇の家柄なのでしょう？」

"En ole sukua suurta, enkä suurta, enkä pientä, olen kerran keskimmäistä.:

Kalervon katala poika, tuhma poika tuiretuinen, lapsi kehjo keiretyinen,

Vaan sano oma sukusi, oma rohkea rotusi, jos olet sukua suurta, isoa isän aloa!"

(クッレルヴォ) 「いや、中ぐらいだ。カレルヴォのつまらない子、愚かで鈍い、ろくでなしさ。ではお前の素姓を語れ。大きな武勇の家柄なのだろう？」

"En ole sukua suurta, enkä suurta enkä pientä, olen kerran keskimmäistä :

Kalervon katala tyttö, tyhja tyttö, tuiretuinen, lapsi kehjo keiretyinen.

(妹) 「いえ、中ぐらいよ。カレルヴォのつまらない娘、愚かで鈍い、ろくでなしよ。」

<木管の短い間奏>

Ennen lasna ollessani emon ehtoisen eloilla, läksin marjahan metsälle, alle vaaran vaapukkahan. Poimin maalta mansikoita, alta vaaranvaapukoita; poimin päivän, yön lepäsin. Poimin päivän, poimin toisen; päivälläpä kolmannella, en tiennyt kotihin tietä: tiehyt metsähän veteli, ura saatteli salolle. Siinä istuin, jotta itkin. Itkin päivän jotta toisen; päivänäpä kolmantena, nousin suurelle mäelle, korkealle kukkulalle. Tuossa huusin, hoilaelin. Salot vastahan saneli, kankahat kajahtelivat :

(妹) 「幼い頃、優しい母といた頃、森にイチゴを摘みに行った。野で摘み山で摘み、1日摘み2日摘み3日摘んだ。しかし帰り道を見失った。森の小道で泣いた。1日泣き2日泣き3日泣いた。大きな山に登って叫んだ。森は私にこう答えた。」

<ピッコロとフルートの神秘的な音型>

Elä huua, hullu tyttö, elä, mieletön melua! Ei se kuulu kumminkana, ei kuulu kotihin huuto.

(妹) 「“叫ぶな、愚かな娘！ 叫びは誰にも聞こえない！”と」

Päivän päästä kolmen, neljän, viien, kuuen, viimeistäki, kohennihin kuolemahan, heitihin katoamahan.

Enkä kuollut kuitenkin, en mä kalkinen kaonnut!

(妹) 「そして、さまよい始めてから6日目、私は自殺しようとしたが、不幸な私は死ねなかった！」

<木管とトランペットによる痛ましい旋律>

Oisin kuollut, kurja raukka, oisin katkenut, katala, äsken tuossa toisna vuonna, kohta kolmanna kesänä, oisin heinäna helynnyt, kukostellut kukkapäänä, maassa marjana hyvänä, punaisena puolukkana, nämät kummat kuulematta, haikat havaitsematta."

(妹) 「そのとき死ねていたなら、私は草となり、かわいい花を咲かせ、美しいイチゴを実らせていただろうに。こんな恐ろしいことを知らずに！ こんな無惨なことを見ずに！」

<ここで妹は自殺する。総休止。木管の悲痛な叫び声。再び総休止>

"Voi, poloinen, päiväni, voipa, kurja, kummiani, voi kun pi'in sisarueni turmelin emoni tuoman! Voi, isoni, voi emoni, voi on valta vanhempani! Minnekä minua loitte, kunne kannoitte katalan? Parempi olisi ollut syntymättä, kasvamatta, ilmahan sikeämättä, maalle tälle täytymättä. Eikä surma suorin tehnyt, tauti oikein osannut, kun ei tappanut minua, kaottanut kaksiöisnä.

(クッレルヴォ) 「悲しいかな、俺は妹を犯した！ 父よ母よ、何のために俺を育てた！ 俺なんか生まれなければ、俺の運命はまだましだった！ 死は、病は、生まれてすぐに俺を滅ぼすべきだった！」

第5楽章 歌詞

※日本語で大意を示しておいたが、逐語訳ではない。正確な訳は『カレワラ』の邦訳を参照されたい。

Kullervo, Kalervon poika, otti koiransa keralle, läksi tietä telkkimähän, korpehen kohoamahan. Kävi matkoa vähäsen, astui tietä pikkaraisen, tuli tuolle saarekselle, tuolle paikaille tapahtui, kuss' oli piian pillannunna, turmellut emonsa tuoman. Siin' itki ihana nurmi, aho armahin valitti, nuoret heinät hellitteli, kuikutti kukat kanervan, tuota piian pillamusta, emon tuoman turmellusta, eikä nousnut nuori heinä, kasvanut kanervan kukka, ylennyt sialla sillä, tuolla paikalla pahalla, kuss' oli piian pillannunna, emon tuoman turmellunna.

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子は、犬を連れて森へ踏み入った。そして、妹を犯した場所を見つけた。そこでは、草も花もすすり泣いていた。そこには若草も萌え出ず、花も咲かなかった。

<木管の絶叫>

Kullervo, Kalervon poika, tempasi terävän miekan; katselevi, kääntelevi, kyselevi, tieteleivi. Kysyi mieltä miekaltansa, tokko tuon tekisi mieli, syöä syyllistä lihoa, viallista verta juoa. Miekka mieltä miehen mielen, arvasi uron pakinan. Vastasi sanalla tuolla: Miks' en söisi mielelläni, söisi syyllistä lihoa, viallista verta joisi? Syön lihoa syyttömänki, Juon verta viattomanki.

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子は、剣を抜いて尋ねた。「俺の罪ある肉を食い、汚れた血を吸う気はあるか。」剣は勇士の気持ちを理解した。剣は答えた。「これまで罪も無い肉すら食い、汚れてもいない血すら吸ってきた。なのに、お前の罪ある肉を喜んで食わず、汚れた血を喜んで吸わずにいられようか。」

<オーケストラが頂点を築く。長大な総休止>

Kullervo, Kalervon poika, sinisukka äijön lapsi, pään on peltohon sysäsi, perän painoi kankahasen, kären käänti rintahansa, itse iskihe kärelle. Siihen surmansa sukesi, kuolemansa kohtaeli.

(男声合唱) クッレルヴォ、カレルヴォの子、青い靴下の子は、柄を地に立て剣先を胸にあて、我が身を差し込み、死を迎えた。

<オーケストラによる長大な間奏ののち、第1楽章の再現>

Se oli surma nuoren miehen, kuolo Kullervo urohon, loppu ainakin urosta, kuolema kovaosaista.

(男声合唱) ここに若者は滅びた、英雄クッレルヴォは死んだ。こうして男の生涯は終わった。悲運の英雄は死んだ。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

村上 治子様	井谷 宏美様	小出 実様
村山 義尚様	鎗本 和弘様	小出 敏枝様
村山 明日香様	谷口 佳隆様	木下 清美様
渡辺 真人様	岡本 幸雄様	西坂 壽美子様
渡辺 和美様	信広 澄子様	松浦 淳司様
松村 里香様	横田 洋子様	梅下 義記様
越後 千代様	吉田 育弘様	大八木 文人様
渡辺 一真様	孝本 浩基様	吉原 和敏様
渡辺 由加理様	吉田 寛子様	大内 きくゑ様
渡辺 晴菜様	飯田 俊也様	岡島 敦子様
小畑 千保子様	大八木 隆子様	小松 朋美様
杉本 幸子様	大東 直勝様	鈴木 一俊様
安藤 美知穂様	吉田 健太様	
稲村 董雄様	せき やすいち様	
遠藤 時金様	政岡 潤平様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(10月現在)

第24回定期演奏会開催にあたり、友の会の皆様より多大なご支援をいただきました。

この場を借りて、団員一同、心より御礼申し上げます。

ご旅行は日本教育旅行で！！

各種旅行会社（JTB・日本旅行 etc）国内・海外
パンフレット取扱い可能！！
他にもスポーツ・音楽合宿、スキー旅行、団体旅行も
取り扱っております。

日本教育旅行株式会社

京都市下京区下数珠屋町通東洞院東入

TEL : 075-351-0405

<http://www.net-freeway.com>

担当 藤田 珠里

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町通荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727(代)

FAX (075) 256-4604

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Kioto

Konserttimestarit

コンサートミストレス

田原 靖子

1 Viulu

第1ヴァイオリン

大八木 文人

- 田原 靖子
- 津田 卓郎
- 西村 せり花
- 渡邊 達之輔
- 稲生 奈美子◎
- 大浦 一馬◎
- 久保田 茜◎
- 高橋 広◎
- 益子 一◎
- 飯田 俊也※
- 前川 信幸※
- 見渡 あおい※

2 Viulu

第2ヴァイオリン

- 小幡 拓也
- 澤田 菜摘
- 田村 うらら
- 中島 円
- 西村 浩輔
- 山口 陽平
- 久保 有加◎
- 中野 大輔◎
- 西邨 奈穂◎
- 松田 千伶◎
- 三村 明依子◎
- 村中 三喜保◎
- 高原 友洋※

Altoviulu

ヴィオラ

ANNIKA BANDE

- 田中 邦人
- 新居 英晃
- 上田 秀樹◎
- 森川 聖子◎
- 富 健一※
- 野田 薫※
- 牧野 貴佐栄※
- 丸山 圭一※
- 吉川 昌毅※

Sello

チェロ

- 小林 豪
- 多田 進
- 波多野 文
- 津田 博隆◎
- 金子 岳史※
- 清水 淳志※
- 舘 雅洋※
- 塚田 毅※
- 綿引 聡史※

Kontrabasso

コントラバス

- 小道 信孝
- 茂原 尚樹
- 鳥山 拓
- 田中 郁太郎※
- 土井 沙耶香※
- 丸山 拓史※
- 宮田 雄規※

Huilu

フルード

- 江藤 佳美
- 加藤 勇仁
- 橋本 亮貴
- (Pikkolo)

Oboe

オーボエ

- 石原 才子
- 西坂 加奈

Englannintorvi

イングリッシュホルン

須貝 絵里

Klarinetti

クラリネット

- 上高原 千寿子
- 田中 慎一郎
- 小林 和久※
- (Bassoklarinetti)

Fagotti

ファゴット

- 石塚 有里子
- 常見 英加

Käyrätorvi

ホルン

- 芦原 俊平
- 片山 真吾
- 草木 美佐子
- 坂口 裕志
- 長岡 武志
- 野田 啓
- 増田 亜由美

Trumpetti

トランペット

- 遠藤 啓輔
- 竹内 恵理
- 中西 美智子

Pasuuna

トロンボーン

- 飯田 智彦※
- 河原田 佑美※

Bassopasuuna

バストロンボーン

柴田 英吾◎

Tuuba

テューバ

中塚 隆介※

Patarummut

ティンパニ

初井 涉※

Lyömäsoittimet

打楽器

新角 耕司※
 の場 彩子※

◎：団友

※：客演奏者

●：首席奏者

顧問

和田 之宏

団長

長岡 武志

事務局長

西村 浩

弦トレーナー

岩井 英樹

ヴィオラを西岡正臣氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪ 第25回定期演奏会 ♪

2009年6月7日 京都府長岡京記念文化会館
ロット / 『ユリウス・カエサル』 前奏曲 (日本初演)
ヘンデル (ハーティ編曲) / 『水上の音楽』 組曲
メンデルスゾーン / 交響曲第3番『スコットランド』

♪ 新入団員随時募集中 ♪

本日はご来場下さいましてありがとうございます。『クツレルヴォ』の演奏はいかがでしたでしょうか？

さて、現在当団では以下のパートを募集しております。

募集パート：ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス

ピッコロ、オーボエ、クラリネット、ファゴット、トロンボーン、打楽器

※ピッコロはフルート兼務。クラリネットは特殊管兼務。トロンボーンはテナー、バスともに募集中。

※管・打楽器はオーディションがあります。

※コントラバスは団所有の楽器があります。ご相談ください。

詳細は団員募集担当まで、お気軽にお問い合わせ下さい。

団員募集担当 E-mail: recruit@kyotophilolo.com

♪ 「友の会」会員随時募集中 ♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円 【期間】 ご入会いただいた月より1年間

【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilolo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <http://www.kyotophilolo.com/>

クラシック音楽の海外公演・国際交流

海外での公演・国際交流は、現地でのマネジメントが大切です。

弊社は日本のオーケストラの海外公演・国際交流を、真の意味で成功させて参りました。

海外公演・国際交流のお手伝いはおまかせください。

海外公演実績・予定

同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演 1998年, 2001年, 2004年, 2007年

(プラハ:ドヴォルザークホール/ブダペスト:リスト音楽院/ミュンヘン/ヴュルツブルク/グラーツ)

岡山県桃太郎少年合唱団ヨーロッパ公演 1998年, 2005年

(ドイツ:レーゲンスブルク大聖堂/プラハ:ルドルフィヌム スークホール)

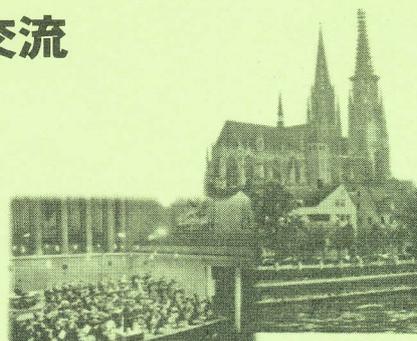
京都市民管弦楽団ヨーロッパ公演 1999年 (ウィーン: ムジークフェライン大ホール)

彦根市ベルリン第九オーケストラ・合唱団 1999年12月 (ベルリン: SFB放送大ホール)

京都市立音楽高等学校ウィーン公演 2007年 (ウィーン: カールス教会)

岐阜県交響楽創立55周年ウィーン公演 2009年 (ウィーン: ムジークフェライン大ホール) 予定

協力会社: ルフトハンザドイツ航空会社、全日空、JTB、近畿日本ツーリスト、AIU保険会社



<http://www.mitsuma.com/>

(社) 日本クラシック音楽事業協会会員

(株) ミツマ・ミュージックプロダクツ

〒605-0009 京都市東山区三条通大橋東入ル大橋町102 田中ビル5F Tel.075-761-1213 Fax.075-752-5568